

外交・安全保障調査研究事業費補助金（調査研究事業）

中露の勢力圏構想の行方と日本の対応：  
『中央アジア・コーカサス・大洋州』の含意」  
（3年度目）  
実績報告書概要



日本国際フォーラム

# 本事業の独自性と3年間で得られた成果



本事業の独自性：「**狭間の政治学**」概念の普遍化の試み  
大国間の力の交差点に位置する国家の行動原理を理論的に整理し、  
コーカサスのみならず、中央アジア、大洋州、アフリカ、日本に適  
用可能な分析枠組を提示

理論的に  
体系化  
(書籍化)

外交政策に資する  
処方箋の提示  
(政策提言の作  
成)

研究成果の  
政策中枢  
国民  
国際世論 } への接続  
(公開シンポジウム、  
研究交流、現役大臣  
との対談)

## 成果 1 : 書籍『狭間国家の生存戦略』の刊行

巻頭対談 「狭間の国家」をめぐって 林芳正×廣瀬陽子

第1章 狭間の政治学——ウクライナに見る光と影 廣瀬陽子

第2章 米中競争時代の中国外交におけるロシアとグローバルサウス 三船恵美

第3章 太平洋島嶼地域における米中対立——島嶼国中立アプローチの現状 畝川憲之

第4章 狭間にあるアフリカ諸国家の生存戦略 遠藤貢

第5章 南コーカサスの地政学——変動する大国間の勢力均衡 ダヴィド・ゴギナシュ

ヴィリ

第6章 拡がれ、日本外交の輪——日本の強みを生かした外交を探求する 高畑洋平



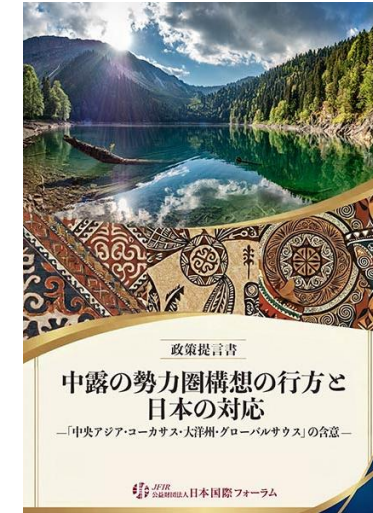
1. 「狭間の政治学」の適用範囲を拡張：中央アジア、コーカサス、大洋州、アフリカといった複数地域に共通する構造として確認される。日本自身も複数の秩序圏の交点に位置するという意味において「構造的狭間」にあることを明確化
2. 「狭間国家の主体性」に関する理解の深化：従来は制約条件として捉えられてきた狭間的状況が、むしろ戦略的裁量を生み出す条件ともなり得ることを明らかにする
  - ☛ 資源外交、経済回廊、制度参加、認知戦・情報戦を通じた主体的行動の重要性を確認
3. 「勢力圏」の概念の再整理：勢力圏を単なる地政学的支配ではなく、政治・経済・制度・認知が相互作用する複合的構造として再定義し、その動態的性質を分析する視座を提示
4. 「グローバルサウス」に関する認識の再構築：グローバルサウスは単一の政治主体ではなく、多様な利害と戦略を有する集合体であることを明確化。複数大国との関係を調整するという意味において、「狭間の政治学」との分析的親和性が高いことを確認。

## 成果2：政策提言書：『中露の勢力圏の行方と日本の対応』の発表

日本外交に対して以下のような戦略的含意を導出

- ✓ ミドルパワーとしての日本の戦略的対外関与の再定義
- ✓ ODAおよびOSAの戦略的再配置と統合的運用
- ✓ グローバルサウスおよび狭間国家との関係深化
- ✓ ナラティブ競争を見据えた情報発信力の強化
- ✓ FOIPを発展させた「連結国家戦略」の提示

➡単なる理念的提案ではなく、三年間にわたる研究蓄積に基づく実証的知見と理論的整理を踏まえた具体的政策指針。



## 成果3：国民・政策コミュニティ・国際世論への接続

- 林芳正官房長官（肩書当時）と廣瀬主査との対談
  - 狭間国家が有する「ヘッジング」「ミニラテラル」「規範形成」等の実践的手法や、国際連合の機能制約の下で各国が自助的対応を強いられる現状認識などを共有
- 外務省本省および在外公館関係者への継続的な情報共有による「実務×知識×経験」の統合的枠組みの構築
- 中央アジア+日本」対話・第14回東京対話
  - 日本と中央アジアの有識者間で、文化交流を「静かな力」として位置付ける認識を共有
- 廣瀬主査によるアゼルバイジャン・ポーランドでの現地研究者・政策関係者との意見交換
  - 日本の研究成果および問題意識を共有、及び「狭間国家」にかかる実証的知見の獲得

